

かいほ ジャーナル



愛します! 守ります! 日本の海

2025
WINTER | Vol. 99

特集

鹿児島航空基地 セブ島運航支援センター
鹿児島海上保安部 鹿児島港給油施設

巡視船と航空機を強力に支援! セブ島運航支援センターと 鹿児島港給油施設が誕生!





PHOTO GRAVURE

- 1 海上保安庁音楽隊 第30回定期演奏会を開催！
- 2 乗組員9名全員救助！荒れる海での果敢な救助活動！
- 2 学術シンポジウム『海上保安における競合と協力』開催
- 3 第24回北太平洋海上保安フォーラムサミット
第20回日韓海上保安当局間長官級協議
- 3 灯台記念日について

- 4 **特集** 鹿児島航空基地 セツ島運航支援センター
鹿児島海上保安部 鹿児島港給油施設

巡視船と航空機を強力に支援！ セツ島運航支援センターと 鹿児島港給油施設が誕生！

12 *NEWS FLASH*

裏表紙

第25回 未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール
灯台絵画コンテスト2024～灯台のある風景～

1

PHOTO GRAVURE

海上保安庁音楽隊 第30回定期演奏会を開催！

海上保安庁音楽隊は、令和6年11月13日、東京文化会館（東京都台東区）において、「海上保安庁音楽隊第30回定期演奏会」を開催し、約1,500名の方々にご来場いただきました。

定期演奏会は、日本海事センター補助事業として海上保安協会の後援により開催している演奏会であり、今年は、音楽隊初となる東京文化会館での演奏となりました。

第30回の節目の演奏会となった今回は、「会場ロビー企画」として、制服・業務紹介パネルや過去の定期演奏会プログラムの展示、YouTubeに投稿している音楽隊の演奏動画の放映、海上保安庁イメージキャラクターうみまる・うーみんの登場など、会場を訪れた方々に楽しんでいただく企画を展開しました。

第1部は、過去の定期演奏会で演奏したことのある楽曲から選曲し、海上保安庁音楽隊のために作曲された「GUARDIANS OF THE WAVES」で幕を開け、「吹奏楽のための第二組曲」などを演奏しました。

第2部は、発売から今年で20周年を迎える大人気ゲームソフト「モンスターハンター」の「英雄の証『モンスターハンター』より」で始まり、ゲストとして2024年海上保安庁118番イメージモデル「小野あつこ」さんに登場いただき、司会者と音楽隊長の3人で自己救命策3つの基本（救命胴衣の着用・連絡手段の確保・118番の活用）についてクイズ形式で紹介後、「ありがとうの花」など2曲の歌唱と共に演奏をお送りするなど、計10曲を演奏し会場を盛り上げました。



制服、業務紹介パネル展示（一部写真を加工しています）



過去の定期演奏会プログラムの展示（一部写真を加工しています）



司会者、小野あつこさんと音楽隊長による広報



小野あつこさんの歌唱



音楽隊集合写真



乗り揚げた漁船



機動救難士・潜水士による救助活動



**乗組員9名全員救助！
荒れる海での果敢な救助活動！**

令和6年10月3日午前零時14分頃、島根県美保関沖にて、漁船「第八十八興洋丸」から本庁運用司令センターに対し「美保関で乗り揚げた。早く助けに来てほしい。」との118番通報がありました。通報を受け、直ちに巡視船艇を発動しましたが、海上荒天により漁船に接近することができませんでした。一刻を争う危険な状況の中、美保航空基地機動救難士や巡視船「おき」潜水士等が松江市消防本部と連携し、付近の崖から漁船へロープを張り、要救助者9名全員を陸上へ引き上げ、救助しました。
今回の救助には高度な技術が必要であり、日頃の訓練や連携の成果が存分に活かされた救助活動となりました。



学術シンポジウム会場



質疑に応答する講演者等



**学術シンポジウム
『海上保安における競合と協力』開催**

令和6年11月23日、一橋大学一橋講堂（東京都千代田区）において、海上保安大学校（海上保安国際研究センター）と公益財団法人海上保安協会の共催で日本財団海上保安研究基金令和6年度学術シンポジウム『海上保安における競合と協力』〜今日の国際環境といかに向き合うか〜が開催されました。
このシンポジウムは、国際法と地域情勢の研究者による討論を通じてその知見を融合させる海上保安国際研究センター（かいほジャーナル97号で特集初の試みであり、質疑応答の際には幅広い年代の聴講者から様々な質問が寄せられたほか、オンラインを含めて400名以上の方に聴講いただくなど、非常に有意義な機会となりました。



会合参加者全員による集合写真



日韓長官級協議の討議記録署名



各国機関長官級集合写真



海洋警察庁長官の大阪湾海上交通センター視察



日韓長官級協議

※「キャンプ・デービットの精神」とは…令和5年8月の日米韓首脳会合で発表された共同声明。ASEAN及び太平洋島しょ国に対する協調した能力構築を目指す3か国海洋安全保障協力枠組みの立ち上げなどについて合意。

令和6年9月23日から26日の間、東京都内において、北太平洋地域の海上保安機関による長官級会合「第24回北太平洋海上保安フォーラムサミット」を開催し、瀬口海上保安庁長官が議長を務めました。会合では、北太平洋における海上の安全・セキュリティの確保を目的とした連携・協力及び今後の活動等について議論しました。

また、会合期間中、「第20回日韓海上保安当局間長官級協議」を実施し、キャンプ・デービットの精神に基づく日米韓合同での海上保安能力向上支援について連携・協力していくことや海上交通センターでの協力などで合意し、キム・ジョンウク海洋警察庁長官(当時)が大阪湾海上交通センターを視察しました。



第24回北太平洋海上保安フォーラムサミット
第20回日韓海上保安当局間長官級協議



大吠埼灯台 (千葉県銚子市)
灯台に掲げられた万国旗と大漁旗



かもだ
浦生田岬灯台 (徳島県阿南市) 一般公開
(一部写真を加工しています)



残波岬灯台(沖縄県読谷村)夜間ライトアップ

我が国初の洋式灯台である「観音埼灯台」(神奈川県横須賀市)の起工日(1868年11月1日)にちなんで、11月1日を「灯台記念日」と定めています。

海上保安庁では、10月から12月にかけて全国各地の灯台で一般公開を行うとともに、各種施設で様々なイベントを実施しました。



灯台記念日について

巡視船と航空機を強力に支援！ 七ツ島運航支援センターと 鹿児島港給油施設が誕生！



令和6年10月、七ツ島運航支援センター・鹿児島港給油施設の運用が始まった。PLH型(ヘリコプター搭載型)巡視船専用基地とヘリコプター駐機場・格納庫が併設されるのは、海上保安庁初であり、海上保安庁として最大規模の給油施設が併設されている。どのような施設なのか、どのように運用されるのか、そしてどのように整備されたのか。最新レポートをお届けする。

取材・文/北川 聡 (フォーラムK)

尖閣諸島周辺の 警備体制強化のために

第十管区海上保安本部から約9キロ南に位置する鹿児島港谷山二区に、巡視船に搭載するヘリコプターとその乗組員及び整備要員を集約する七ツ島運航支援センター(以下、センター)、鹿児島港給油施設(以下、給油施設)が完成。令和6年10月1日から、運用が始まった。

尖閣諸島周辺海域では、中国海警局に所属する船舶がほぼ毎日確認され、領海侵入も繰り返されており、中国海警局に所属する船舶の大型化、武装化、増強も進んでいる。それに対して、海上保安庁は平成28年以降、「海上保安能力強化に関する方針」などに基づき、大型巡視船の増強に取り組んでいる。

沖縄にある第十一管区海上保安本部とともに尖閣諸島周辺の警備に重要な役割を果たす第十管区海上保安本部には新たに建造されたPLH型巡視船(以下、PLH型)が順次配属され、現在、鹿児島海上保安部に所属するPLH型は5隻、鹿児島航空基地に所属するヘリコプターは鹿児島海上保安部所属PLH型から配属替えされた10機を加えて12機体制となった。センターと給油施設は、拡充したこれらの勢力をより効率的に運用するため必要とされたのだ。



格納庫



PLH型巡視船「あさなぎ」と「ゆみほり」

きつかけはPLH型巡視船の給油状況の改善

センターと給油施設の整備事業の名称「海上保安庁鹿児島港給油施設等整備事業」が示すように、事業に着手するきっかけは給油施設の整備だった。

令和2年2月、鹿児島海上保安部に巡視船「れいめい」と「しゅんこう」の2隻のPLH型が就役したとき、管内の燃料輸送業者の能力では対応できないことが問題になった。このため、安定的にPLH型に対応できる給油施設を陸上に建設することが急務となった。

給油施設と併せて、ヘリコプターの保管整備場所不足が問題になっていた。

PLH型とともに増加するヘリコプターを保管し整備する場所を、まず確保しなければならぬ。折よく給油施設の予定地に格納庫を建設できる余地があったため、併せて建設することになった。

効率的な運用を実現するために

これらの経緯を踏まえ、より効率的な運用・整備体制を実現するための手法として「ヘリコプターと職員の一元的な管理」を目指すこととなった。第十管区海上保安本部では令和3年度から5年度に

かけてヘリコプターの効率的な運用の実現に向け、鹿児島海上保安部、鹿児島航空基地を交え様々な検証や検討を行い、本庁関係課とも協議を重ね組織体制、業務方針等を決定。令和6年4月15日、本部内に「七ツ島航空支援センター準備室」を設置した。準備室員を中心にセンターの運用開始に向けた様々な準備を進め、10月1日に鹿児島航空基地の内部組織として、七ツ島運航支援センターの運用がスタートした。



ヘリ着陸

インタビュー

意思疎通を図って基地とセンターの距離をカバー

鹿児島航空基地のヘリコプターの機数は12機で全国の1/5が鹿児島に配備されており、機体数は全国の海上保安庁の航空基地の中では最多になります。

航空職員の魅力は現場の第一線で仕事ができること。海難救助、警備、取締りといったほとんどの案件に携わることができ、管区全体を知ることができます。「管区を背負っている」という意識もありますね。

センターの体制を整えて、訓練効率も上げていきたいと思えます。吊上げ救助訓練などの業務訓練に加え、資格取得訓練を充実させることは要員養成にも繋がるので大いに期待しています。

難点は航空基地とセンターの距離が約50キロメートル離れていることでしょうか。直接会って対面でコミュニケーションを取るのが難しい。毎日、テレビ会議で朝会をやってセンター職員との意思疎通を図っています。私の仕事の流儀の一つに「自分の目で見る」ということがあります。実際に現場で職員から話を聞いて、業務の進捗状況も把握した上でトータルで導いていくことが大事だと思います。



第十管区海上保安本部
鹿児島航空基地 基地長

ひらはら あやき
平原 文基

海保初の取組となる

ヘリコプターと職員の一元的管理

海上保安庁で初めての採用となるヘリコプターと職員の一元的管理とはどのような制度なのか。一言でいうと、鹿児島海上保安部所属のPLH型に搭載するヘリコプターと、同船に乗る航空科の職員をセンターに集約し、PLH型に派遣する制度である。

センターの人員は、所長及び管理・運用担当として5名、航空要員として飛行、整備、通信の定員が77名、合計82名。

従来、複雑で長期間を要するメンテナンス作業はPLH型船内での実施が困難なため、鹿児島航空基地又は民間格納庫に機体を空輸して行っていたが、巡視船専用基地に併設された格納庫等で行えるようになり、運用上のメリットは極めて大きい。また、駐機場から離発着できるため、巡視船とは別行動で、ヘリコプターが単独で任務に従事することも容易になるうえ、船上から離発着する際のさまざまな制約要因が減るメリットもある。

センターと給油施設の設計

センターは鹿児島航空基地の管理下にあり、主に格納庫棟と事務室、用品庫等

七ツ島運航支援センターの役割



整備の完了した機体と、乗組員をセットにして派遣

で構成されている。建築計画は国土交通省の「低炭素建築物認定制度」に沿って行われ、環境への配慮がなされた建物となっている。

設計においては機能性、強靱性・耐久性、環境配慮の三つの要素を兼ね備えていることが求められた。なかでも重視されたのが環境配慮だ。自然由来のエネルギーを有効活用することで、二酸化炭素の削減はもちろん、省エネルギーによる運営コストの削減も達成している。

大きな課題の一つが、高温対策である。格納庫の屋根が太陽光の熱射によって熱くなることは避けられない。かといって庫内全体を冷却するためにエアコンを用いれば多大な電気代がかかってしまう。このため、センターの建屋は多くの工夫が凝らされている。

まず、屋根上に貯留した雨水をろ過し散水することで、屋根温度の上昇を抑制している。また、海上保安庁として初めて導入したシートシャッターの上下開きという特性を利用し、格納庫南側の窓と的高低差を作り出すことで、空気を自然循環させ、庫内の温度を下げている。熱負荷の大きい南面には干渉帯として整備室等を設け窓を設置しないことにより、格納庫の熱負荷を低減。エアコンなしでの空調管理を実現した。

格納庫は約4,460平方メートルの面積があり、海上保安庁の格納庫としては全国で一番の広さを有している。格納庫前面は迅速に開閉可能なシートシャッターを採用。格納庫内には整備用クレーンを2基設置。また、格納庫西側にはフリースペースを設け、整備資器材やフォークリフト、けん引車等の置き場として活用している。洗機用スペースも設け、格納庫内でも洗機が行える。グレーチングを施して廃液を一箇所に溜めて廃水処理を行うことで、洗剤が敷地外に流れない仕組みであり、環境配慮に余念がない。

給油施設は鹿児島海上保安部の管理下にあり、給油監視棟と屋外貯蔵タンク等給油関係施設で構成されている。

給油監視棟は施設を管理する事務所で、パソコンを介して給油設備に指令が送られる。高度な技術が必要とされるため、プロフェッショナルな民間業者に事業委託しており、海上保安庁の建物の中に民間の事業所があることも海上保安庁にとって珍しいケースだ。

屋外貯蔵タンクは2基あり、1基あたりA重油を3,500キロリットル貯蔵できる。タンクから栈橋まで設置された配管を通じて、係留している巡視船に給油することができる。



格納庫



格納庫内 シートシャッター



格納庫内 洗浄機



点検を行う整備士



仮眠室



シャワールーム

事案対応への備え

突発的な事態にも対応することは、センターにとって非常に重要なミッションである。

まず、ヘリコプターに対しては、地下に航空用燃料タンクがあり、いつでも給油ができる。また、照明設備を備えていることから夜間の離発着も可能だ。

巡視船への給油は、従来、給油船が接舷し船同士をパイプで接続して行っていた。接続するまでの手間がかかるだけでなく、給油船が何らかの理由で入港できない場合、計画通りに巡視船が給油できず、運用を再調整しなければならぬ状況が発生する。給油施設ではパイプラインからの送油になるので給油船の影響を受けずに計画通りに給油することができるようになる。

インタビュー



第十管区海上保安本部
鹿児島航空基地七ツ島
運航支援センター 所長

山本 修

ストレートに意見を出し合い地盤を固める

整備事業の開始当初、私は本庁航空機課専門官として PFI 事業（民間資金を活用した事業）による船舶燃料給油施設及び格納庫の整備にかかる予算要求、必要な施設設備の検討等を担当しており、まさか数年後にその中心地に来るとは思いもしていませんでした。初代センター所長としてのプレッシャーはすごいです。

センターの業務は鹿児島航空基地に加え、鹿児島海上保安部所属巡視船との連携が重要になると考えています。

安定した職員・ヘリコプターの一元的管理の実現に向け、業務の調整や細かな運営規則の確立を現場の職員全員で意見を出し合いながら進めています。私はあまり隠さずに言うようにしていますので、何でも正直に言って欲しいと思っています。若い職員も多いのですが、自分一人ですることはたかが知れています。無理なときは普通に「できません、助けてください」と言ってもらえば、誰かがフォローする現場にしていきたいです。



七ツ島運航支援センターと鹿児島港給油施設



格納庫内



長官視閲

海上保安庁



建設中の七ツ島運航支援センターと鹿児島港給油施設



巡視船への給油装置

民間資金等の活用による 公共施設等の整備事業(PFI)を 導入して事業を推進

今回、整備事業を推進するにあたり、海上保安庁は民間資金を活用した公共施設等の整備事業(PFI)を導入し、民間10社により本事業のために設立された特別目的会社と事業契約を結んだ。事業費は2044年3月末までの維持管理、運営費を含め約110億円である。

PFIを導入した大きな理由は巨額の事業予算であった。海上保安庁では、予算は基本的に単年度で組まれるが、設計・建築・維持管理・運営を含む今回の事業費を単年度予算の中で組むことは不可能だった。そこで、国庫債務を使う22年契約のPFI事業として予算を計上し、令和3年6月に事業をスタートさせることができた。

PFI事業としたことで予算問題が解決できただけではなかった。公務員的な考え方とは一線を画したことにより、柔軟な発想をフル活用することができたのだ。

現場の民間事業者と本庁の間にとって、事業を推進したのが第十管区海上保安本部経理補給部経理課の業務調整係(現在の一括事業係)である。担当職員は民間の知識や技能を活用して、設計段階から

あえて具体的な内容を要求せず、話し合いを進めながらイメージを固め、事業を進めた。斬新なアイデアや譲れないところは根気よく説得することの繰り返しだった。

給油施設タンク1基あたりの容量を増量(2,000キロリットルから3,500キロリットルに)する反面、コストや点検回数を削減するための設置基数の削減(3基を2基にする)や、格納庫に初めて採用したシートシャッターは、パートナーとなった民間事業者からの提案を採用した。コストを抑えるために、防油堤がある給油施設の地盤のかさ上げをセンターより低くしたのも民間ならではの柔軟な発想から出たものだった。

着工は令和5年6月。作業がふくそうし東京にある本庁では現場の状況確認や各種調整が難しい状況に進展したため、令和6年4月、第十管区海上保安本部に民間資金を活用した施設等の整備に対応する「一括事業係」が新たに設置され事業を引き継いだ。ちなみに一括事業係は他に本庁と海上保安学校のみにある部署だ。

数々の斬新なアイデアと海上保安庁初となる取組が盛り込まれたチャレンジの象徴ともいえる七ツ島運航支援センターと鹿児島港給油施設。大きな期待に応えるべく、一丸となって業務体制の確立に取り組んでいる。

施設建設に携わった全ての人に感謝

昭和54年10月、鹿児島海上保安部に海上保安庁全体で3隻目の、十管区では初のPLH型巡視船「おおすみ」が配属された。

当時、ヘリコプターの船上運用は始まったばかりで手探りの状態であったが、職員は一丸となって海上保安業務と安全運航に向き合い運用手法を確立した。

「おおすみ」配属から45年目の今年、十管区のPLH型は5隻となった。

巡視船やヘリコプターが大型化、高機能化した現在においても安全運航の要は人である。

PLH型巡視船と搭載ヘリコプターの安全運航を支えているのは職員の高い士気と高度な専門的知識に裏打ちされた優れた運用技能と確実な点検整備である。

真新しい格納庫でヘリコプターの点検整備に向き合う職員の真剣な眼差しには使命感がみなぎっており、歴代の職員が培ってきたノウハウとマインドがしっかりと受け継がれていることが確信できる。

巨大な格納庫とそびえ立つ2基の燃料タンクからは、完成までに携わってきた多くの職員の苦勞がしのばれる。

赤松宏樹第十管区海上保安本部長は、「巡視船艇・航空機の勢力や新しく完成した施設を十分に活用し、尖閣諸島領海警備体制の強化、大規模な災害発生時における災害対応を的確に行うとともに、管内における外国船舶の活

動監視・警戒など海上における法執行機関として、関係機関と連携の上、冷静かつ毅然と対処していく所存である。施設整備の構想から七ツ島運航支援センターと鹿児島港給油施設の運用開始に至るまでの間に力を尽くしてきたすべての職員に深甚なる敬意と感謝を表したい。」と語った。

機体整備と燃料搭載の効率アップに期待

本船はヘリコプターを2機搭載しています。定期的に整備をする必要がありますが、航海中は船体動揺等で思うような整備ができません。入港して他の乗組員が休んでいるところ、航空整備の人たちが出勤して整備をしている状況が多々ありました。今回、完成したセンターはヘリコプターのメインローターブレードを広げた状態で駐機できるほど広く、整備を行うための設備が整っています。整備をする上ですごくやりやすく、計画通り進みやすいんじゃないでしょうか。巡視船に給油する際、いままでは長崎や瀬戸内から給油船が来て給油していましたが、「3日後に燃料を積みたい」というのは今までは無理だったのではないのでしょうか。しかし、これからは陸上の大きなタンクに蓄えた燃料をパイプラインを介して給油することができるようになります。私たち巡視船乗りからすると、燃料搭載の融通がききやすくなることに期待が持てますね。



鹿児島海上保安部
巡視船「あさなぎ」船長

菊地 元



多様なニーズに応え フライト計画を作成

専門官（運用管理担当）

のむら

ようへい

野村 洋平

センターに来る前は、第十管区海上保安本部の環境防災課や救難課に所属し、一貫して救難関係の仕事をしてきました。機動救難士として6年間航空基地にいたことと、巡視船の運用経験がありましたので、機体の運用は初めてですが抵抗はありませんでした。

担当業務はセンターに配備している10機の搭載機の運用調整です。乗組員の資格取得の訓練や他の巡視船からの派遣要請だけでなく、乗組員の「技量の向上を図りたいので機動救難士と訓練したい」という自発的なリクエストにも応えてフライト計画を組み立てています。今までは巡視船の行動に合わせて機体を運用していましたが、センターに集約されてからは、多くの部署からのニーズや期待に応えなければなりません。そのためには、まずここで働く職員が「ここができて良かったよね」と言えるようなセンターを築かなければなりません。執務室では科の垣根を越えて、日々いろんな意見を出し合っており、センターの土台作りにも励んでおり、やりがいを感じる毎日です。

interview

センター職員 インタビュー



効率的で安全性の高い 運航を常に心がけています

主任飛行士

やまぐち

あきひろ

山口 明大

センターができる前はPLH型の航空科で勤務し、ヘリコプターを運航していましたが、基本的に動揺がある中での巡視船の飛行甲板から離着船をしていました。船の揺れが大きい時は機体の引き出し、引き込みにも時間がかかったり、揺れが一定以上大きくなると離着船ができないという問題がありましたが、地上のヘリポートに移った時点でそういった悪条件の縛りから解放されました。

また従来、PLH型では、乗船しているヘリコプターの運航要員に限られており、体調不良などで作業ができなくなると、その調整が非常に困難になるため、体調管理の維持に大変なプレッシャーを感じながら仕事をしていました。人的なリカバリーが柔軟にできるように、センターのような施設ができればいいなとPLH型に乗船している頃は感じていました。

センター職員の運航スキルをみんなで共有することで、効率的な仕事ができるだけでなく安全運航にも資することができると常々考えて業務に取り組んでいます。



クルーの現場での 活躍が私の喜び

専門官（地上支援担当）

まえはた

まこと

前畑 誠

施設管理、人事、総務、厚生関係、経理補給関係といった管理業務全般を担当しています。本部の経理課長をしていた時に、七ツ島の岸壁の手配や県との交渉などに数年間携わっていました。この辞令が来た時には「また来たのか、最後もここか」と感慨深かったですね。

何も無いところからのスタートですので、納品される机、椅子、電化製品など1,000点以上の物品を仕分けて納品検査を行い、体制を確立するために細々とした実施要領も作成していかなければなりません。開所したばかりですので、毎日のように見学や視察に来られ、基本的に所長と2人で対応する状況がずっと続いています。

多忙な毎日ですが、現場で業務を行う皆さんがしっかり仕事できれば、それが私の喜びになります。センターができたことによって、皆さんのこれまでの苦勞が軽減し、迅速な対応ができるなど、このメリットが発揮できるよう頑張っています。



プロの設計士の細やかな配慮に感心

第十管区海上保安本部
経理補給部経理課一括事業係

よこやま なおき
横山 尚輝 (写真左)

第十管区海上保安本部
経理補給部経理課一括事業係長

いまなら ゆうき
今奈良 友貴 (写真右)

一括事業係は経理補給部の施設担当で、現在の基本的な業務はPFI事業(民間資金を活用した事業)による施設等の整備です。本施設の整備事業は、令和元年6月からPFI事業をするための事前調査(導入可能性調査)が始まり、建築開始は、令和5年6月からで、約2年間かかりました。約5年間の集大成となります。

海保の中で話し合っまとめた計画を、地方自治体や民間企業、近隣住民にまで広く伝えて納得してもらって調整作業が一番大変でした。

また、民間の知識や技能を活用することが大前提としてあったため、従来のようないわば決め打ちの指示ができませんでした。当初は業者の方も、我々の運用の仕方や海上保安庁がどういった使い方をしたいとか、ということが初めてなのでわからない状況でしたが、こちらの要求に真摯にかつ柔軟に応じていただき、非常に良い仕事ができたと感じています。プロの設計士の細やかな配慮には何度も感心させられました。当庁にとってもこれほど大きなPFI事業は初めてであり、調整作業はとても大変でしたが、人に恵まれ楽しく仕事をすることができました。

本施設が国民のため、職員のための有益な施設として利用されることが我々の期待です。



モットーは安全第一、 基本に忠実

主任通信士

いわもと まさひで
岩元 正英

ヘリコプターに搭乗している時は、地上の航空基地および海上の巡視船との無線のやり取りが主になります。一般船舶や救助の対象となる船と直接無線で通信を行うこともよくあります。

各種の通信装置を的確に操作して、状況を正確に伝えることが大切です。連絡のやり取り一つでうまくいく時とつかない時があり、機長の意図を正確に伝え、連携がうまく取れて業務がスムーズに進んだ時にはやりがいを感じます。

センターの通信室で業務をするときは、気象情報や業務の情報を適切に伝えるなど、飛行しているヘリコプターに対する支援が主な業務になります。飛行しているクルーの心理的負担にならず、ストレスをかけないように心がけています。

今まではそれぞれの巡視船が行動や休養をとっているのですが、どうしてもPLH型同士の横のつながりが希薄でしたが、センターでまとまることによって情報交換が以前よりスムーズになり、様々な調整などの効率化が図れるのではないかと期待しています。



コミュニケーションを 重視して事故を防ぐ

上席整備士

きくち まさひろ
木幡 章弘

基本的な業務は、飛行時間ごとの点検と定期的な点検による航空機の安全性の確保です。ボルト1つ締める時も、きちんとマニュアルを見て求められる締付トルクを調べた上で整備作業を行っています。整備はチームで行います。お互いにコミュニケーションをとって不具合を見逃さないように心がけています。

センターができる前までは、巡視船が航海している間は船上で必要最小限の整備しかできず、船が入港後に整備作業を行っていたので、休みをとりづらいことが課題でした。

また、ジャッキアップの必要な作業などは格納庫で行う必要があり、従来は、ヘリコプターを鹿児島航空基地に運んで整備作業をしていました。センターができて移動時間を考える必要がなくなり、一元的で効率的な整備を行えるようになりました。機種ごとに資格が必要なのですが、機体が集約されたことで整備の経験が増え、整備の資格を取る上で経験も積みやすくなりました。これからは整備士教育にも力を入れて有資格者の確保をしていきたいですね。

10月 一管区 釧路保安部 10月4日

消防機関との合同潜水訓練



NEWS FLASH

2024年9月-11月

九管区 本部 9月27日

能登豪雨捜索対応



9月 学校 保安学校 9月21日

海上保安学校卒業式



七管区 大分保安部 10月8日

三機関合同潜水訓練
(大分県警、大分市消防局、大分海上保安部)



本庁 三管区 広報室 本部 9月23日

練習船「いつくしま」横浜一般公開
～小野あつこさんと訓練を見学しよう!～



四管区 中部基地 9月28日

「空の日」イベントでの記念撮影



六管区 松山保安部 10月16日

第27回「海の図画展」



(一部写真を加工しています)

二管区 八戸保安部 9月29日

八戸海洋少年団体験学習会



大学校 9月24日

小説家吉川英梨氏
海上保安大学校長を表敬訪問



十一管区

本部

11月7日

第十一管区警備救難競技選考会



七管区

本部/大分保安部

11月10日

「第43回全国豊かな海づくり大会」に伴う海上警衛



十管区

八代保安署

11月11日

みなと八代フェスティバル2024



本庁

教育訓練管理官

11月27日

海上保安政策プログラム第10期生 国土交通大臣表敬



十管区

鹿児島基地

10月30日

鹿児島航空基地 機動救難士発足20周年



11月

八管区

敦賀保安部

11月1日

地域青少年キャリア教育支援プログラム始動!



一管区

釧路保安部

11月2日

釧路埼灯台～灯台記念日特別展～



一管区

釧路保安部

11月2日



八管区

本部

10月20日

ブルーフェスタ2024



三管区

羽田基地

10月21日

LAJ502就役 ~ガルフV 3機目~



二管区

本部

10月23日

二管区警備救難競技大会



五管区

岸和田保安署

10月26日

フィールドワークキャラバン ~女性保安官熱弁! 伝われ私の熱血魂!!~



第25回

未来に残そう青い海・海上保安庁図画コンクール

共催：公益財団法人海上保安協会



小学生低学年の部 つしぐち けい 桂衣さん



小学生低学年の部 とまり あすか 泊 明輝さん



小学生高学年の部

新田 芽以さん



中学生の部

鈴木 咲紅さん



小学生低学年の部 もり ひまり 森 陽葵さん



小学生高学年の部

村田 良太郎さん



中学生の部

木村 綾乃さん



灯台絵画コンテスト 2024

～ 灯台のある風景～

主催：公益社団法人燈光会 後援：海上保安庁



題名 世界の灯台 ～夜の灯り～
すずき ゆうや 鈴木 結仁さん



題名 美保関灯台
いしばし りさこ 石橋 里咲子さん



題名 未来を照らす灯台
ささき こはる 佐々木 恋春さん

